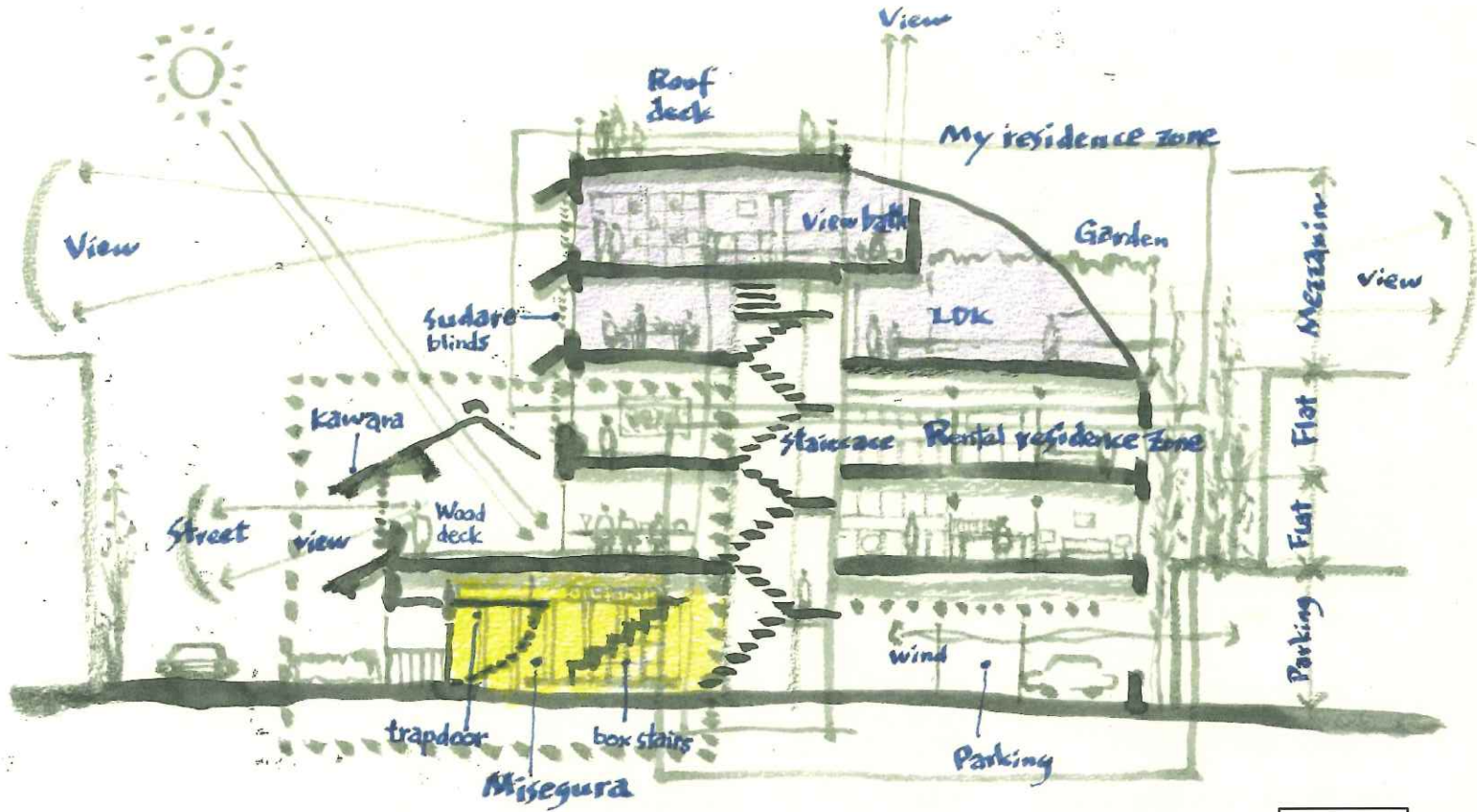


私の家

スケッチ・文 — 建築家 山岡嘉彌



おうていきよ 「鶯啼居」

連載「私の家」は、建築家が一枚のスケッチを通して自邸を語る頁である。どのような思想に基づいてつくられた空間なのか、あるいは日々どのように過ごす場所なのか、写真ではないぶん、想像力を働かせ、読み込んでいただきたい。第17回は、建築家・山岡嘉彌さんの自邸である。山岡さんの家は江戸時代から続く商家で、地価の高い東京・麻布で築250年を超える店蔵を守ってきたが、この先のことを考え、その店蔵を取り込んだかたちで集合住宅に建て替えた。店蔵のこと、そして新しい暮らしについて綴ってもらった。

私の家系は、仙台藩松平陸奥守(伊達政宗公)の出入り商人で、2020年までは「江戸御府内最古の店蔵」を玄関とした「店蔵+主屋」で暮らしていた。明暦の大火のあと、現在の南麻布に仙台藩の下屋敷ができたことから、大名屋敷への出入り商人の町がつくられていったようだ。江戸中期のこの地の「沽券」などの資料によると、均等の間口の長屋が道の両側に1列に軒を連ねていたことがわかる。わが家は、近江商人の末裔として店を構え、菓屋として商いを始めた。その「店蔵」には、菓箱でもあった箱階段、提灯箱、菓屋の菓看板などが、往時のおもかけを留めていた。明治以降商店街として盛っていたこの通りも、戦後は徐々に「蔵」をもつ商店もなくなり、ついにわが家の「店蔵」が、唯一の「蔵」になってしまった。「店蔵」を残すために、集合住宅に建て替え、ほぼ同じ位置に再生した。どうにも保存がかなわなかった主屋も、奇跡的なことに引き取り手が現れ、谷中に移築・再生されることになった。建て替えにより、集合住宅の最上階へと場所は変わったが、「陰翳礼讃」「墨」の世界を引き継ぐべく、モノクロームの無機質の色合いと「タスク&アンビエント照明」によって、「日本の美」、江戸時代から続く日本人の「精神性と感性」を感じられる空間をつくった。かつての和室の連なる商家の空間に通じる「和」の心に満ちた空間で、快適に過ごしている。

山岡嘉彌(やまおか・よしや)
1946年東京都生まれ。1971年武蔵工業大学(現・東京都市大学)卒業。1974年早稲田大学大学院修了。1974〜1991年坂倉建築研究所。1991年山岡嘉彌デザイン事務所設立。現在に至る。